

国際演劇交流セミナー 2015

International Theater Exchange Seminar 2015

デンマーク特集

【ダイジェスト版】

「わたしと彼は何が違うのだろうか?」、2011年ノルウェー連続テロ事件を題材とした『マニフェスト2083』を中心に、現代では何が問題とされ、どのようなアプローチから演劇は考えることができるだろうか。上映会、ワークショップ、リーディング、そしてシンポジウムから浮かび上がる演劇が現在立たされている場所を浮き彫りにする!

2011年のノルウェー連続テロ事件を題材とした『マニフェスト2083』は演劇だけでなく社会に大きな衝撃を与えた。

「わたしと彼は何が違うのだろうか?」 移民問題、反イスラム、格差問題、言論の自由などを捉える際に陥りがちな<正しさ>へ疑問を提示し、演劇を通して考えることとなった。

デンマークSH劇場から芸術監督かつ劇作家クリスティアン・ロリケChristian Lolike、劇作家マス・マザンチ・イェンセン Mads Mazanti Jensen が来日し、ワークショップとレクチャー、シンポジウムを行いました。

企画：佐々木治己

【in 東京】 会場：芸能花伝舎

上映会『マニフェスト2083』

11月6日(金) 18:00~21:00

ワークショップ

11月26日(水) 13:00~19:00

11月27日(木) 13:00~19:00

11月28日(金) 18:00~21:30

レクチャー

11月29日(日) 17:00~18:00

講師：クリスティアン・ロリケ

シンポジウム

11月29日(日) 18:00~20:00

「現代演劇の課題、自主規制について」

パネラー：クリスティアン・ロリケ

マス・マザンチ・イェンセン

青井陽治 村井雄 保木本佳子



○ 講師
クリスティアン・ロリケ



○ 講師
マス・マザンチ・イェンセン

クリスティアン・ロリケ / Christian Lollike

1973 年生まれ。劇作家。演出家。Sort/Hvid 劇場芸術監督。舞台芸術に関する受賞多数。デンマークを代表する劇作家の1人であり、劇場やパブリックスペースにおいて、インスタレーションや舞台作品を作る。また、戯曲（テキスト）はデンマーク、もしくはヨーロッパ以外のさまざまな地域で上演されている。ここ最近では、バレエやオペラ・インスタレーションを積極的に手がけ、アート・ジャンルの境界線上を行き来するような創作活動を行う。ロリケの作るアート作品の根底には、社会の流行やイベント、政治的な状況の変化を、作品を通して思考する目論みがある。



マス・マザンチ・イエンセン / MADS MAZANTI JENSEN



1977 年生まれ。劇作家。オールボー劇場やカフェ・シアター等で作品を発表。2002 年、2007 年と来日し能を学び、今年、能に関する書籍を出版。2014 年クリスティアン・ロリケとともにSort/Hvid 劇場へ関わる。

Sort/Hvid 劇場

デンマークの首都コペンハーゲンにある、デンマーク語で黒（Sort）と、白（Hvid）を意味するSort/Hvid劇場は、演劇、舞台芸術、現代美術などに関する国際プログラム作品の製作を様々な方法を通して行っている。ここ最近の活動は、新しい試みとして現代の劇的な社会変化を理解するために、心理学や政治的な 이슈を用いて、現代社会と関連する作品を作っている。議論がまき起こるような政治的な要素や、ジャンルを越えるような作品、公共的にある議論に対してあらゆる側面からの疑問を投げかけること、それらを基盤にデンマークに限らず諸外国の研究所、フェスティバル、劇場と共同して国際的な展望を持つ劇場にするために活動している。

【 in 東京 】会場 芸能花伝舎

● 上映会『マニフェスト2083』

11 月 6 日（金） 18：00 ～21：00 ゲストスピーカー：高橋宏幸

ワークショップ

● 1日目 11 月 24 日（火） 13：00 ～17：00

● 2日目 11 月 25 日（水） 13：00 ～17：00

● 3日目 11 月 26 日（木） 13：00 ～17：00

リーディング 『ノーマルライフ』（作：クリスティアン・ロリケ、演出：保木本佳子） 19：30 ～21：30

● 4日目 11 月 27 日（金） 13：00 ～17：00

リーディング『予定通りの出発』（作：マス・マザンチ・イェンセン 演出：青井陽治） 19：30 ～21：30

● 5日目 11 月 28 日（土） 13：00 ～17：00

リーディング『マニフェスト2083』（作：クリスティアン・ロリケ 演出：村井雄） 19：30 ～21：30

レクチャー 11 月 29 日（日） 17：00 ～18：00

講師：クリスティアン・ロリケ

シンポジウム 11 月 29 日（日） 18：00 ～20：00

「現代演劇の課題、自主規制について」

パネラー： クリスティアン・ロリケ

マス・マザンチ・イェンセン

青井陽治 村井雄 保木本佳子

司 会： 高橋宏幸

○ **イエンセン** 最初に、このワークショップの目標についてお話しします。基本的には、私とクリスティアンが書いた戯曲を、もし皆さんが演じるとしたら、演出するとしたら、どんな風にやれるだろうか？ というテーマです。時間もあまりありませんので、実際の上演に向けての演出というよりは、基本的な原則の理解といったものでしょう。



最初は私の作品を紹介します。『予定通りの出発』です。

この作品には、二つの時間があります。2013 年と 2023 年の時間です。背景となるのは経済的な危機です。この経済危機がなければ、みんな幸せだったはずなのです。しかし、経済が良くても人間は必ずしも幸せではありません。このワークショップでは人間的な気持ちと、人間的な関係にフォーカスします。

私の演出のスタイルについてですが、あるとき私は、ある演出家から「あなたは壊れたリアリズムで考えた」と言われました。私はそれを聞いて憤慨し、「なんだ、それは？」と思いました。私としては、心理的リアリズムがありながら、リアリズム的でない要素も入れ込んだというつもりです。

『予定通りの出発』は長いので全編はやれません。人物を選んで、その関係を研究しましょう。一番大事なものは、ヤンセン社長と息子テオの関係です。シーンをやってみましょう。16 場。ヤンセンと精神科医の場面です。

・ 読み合わせる

○ **イエンセン** 先ほどお話したように、登場人物の気持ちと関係性を探りたいと思うのですが、単にリアリズム的ではない要素も加えてみたいと思います。そのため、役を演じる方以外の人も必要です。

A さん、ヤンセンの魂のような存在となってください。上演のときには、ヤンセンと同じ顔の面をつけてもらいます。そういう演出を大胆に試してみます。やってみましょう。

・ 稽古

○ **参加者** 今やっていることの目的、なぜ、3 人目の人物(=ヤンセンの魂)が舞台上にいるのか？ということをご説明いただけないでしょうか？

○ **イエンセン** このシーンの最後に、なぜ、3 番目の人物(=ヤンセンの魂)が近づいてくるかというと、ヤンセンが自分の問題をちょっとだけ乗り越える、責任を果たすことによって、少し自分を許せるようになる、そういう希望が出てきたとい





うことなのです。心理的リアリズムの層の上に、そうではない層を重ねるということです。心理的な表現と象徴的な表現を混ぜるのには危険が伴います。こうした演出には時間が必要です。観客もよく「これ何？」となります。でも、そういった作り方の原則をご紹介します。うとしているわけです。

■ ロリケ 1 回目

● 物語ではなくテーマを描く

○ ロリケ では、『ノーマル・ライフ』についてお話をします。劇作の勉強をするため学校に行ったとき、リアリズムでの伝統的な劇作法による授業の中で、よく先生から「君のこの人物はこんな風に話さないはずだ。それは彼のキャラクターではない」などと言われたものです。それで私は、違った劇作法を探しはじめました。そしてドイツ流の劇作法と出会いました。

この作品を書き始めたきっかけですが、デンマーク人はよく世界中で最も幸せな人たちだと言われます。どういふモノサシで測ったのか知りません。しかし、同時に極めて高い自殺率があり、また抑鬱状態に悩む人が多いのです。私の国の人々は不安を持ち、自分がよって立つ価値を見つけるのに困難を感じている人が多いと思います。常に自分自身を演じ、自分の個性的なライフスタイルを見つけなければならないのです。それが、私が探求したいと思ったテーマです。私は物語を書きたいというよりは、テーマを追求したいのです。物語は断片化されたものを取り入れて、利用しています。

この作品には、いまの自分たちや社会構造を客観的に見て笑い飛ばすような部分があります。それからベルトルト・ブレヒト的な異化効果的な部分もあります。テキストには二つのレベルがあって、一つはメタ・レベル、ちょっと奇妙なレベルです。もう一つは正気を失いそうになっている女性に関する普通のレベルのドラマです。ですから演出家として自分に問わなければいけないのは、この二つのレベルをどのように分けるのか、あるいは、分けないのか？ ということではいけないと思います。

● 作家としての自分と、演出家としての自分を分ける

○ ロリケ 私が自作を演出するとき、俳優には、作家は私ではなく別の人間だと思ってもらうようにします。私は、演出家としての自分と作家としての自分を分けられると思っています。それには少し時間が必要ですが、可能だと思っています。演出をするとき、私はとくに固まったプランを持たずに、どうやって上演するかも、稽古をしながら探求していきます。しかし、私は常に、何らかのラジカルなツールを求めています。それをもってテキストに切り込み、興味深い形式を発見したいのです。

○ **参加者** ラジカルなツールとは？

○ **ロリケ** ラジカルなツールとはつまり、私はいつもある種の、とても強烈な、表現主義的な演出方法を探しているのです。その方法です。

では、立ってやってみましょう。最初は全員に参加していただきたいです。

・全員が列を作って並び、一斉に笑い、突然止まり、それからセリフを言うなど、様々な実験的演出を行う。

● **参加者との質疑応答**

○ **参加者** ナレーターが喋ってから登場人物が動くという演出の意図は？



○ **ロリケ** 何となく感覚的にそれがいいと思ったからやってみたのです。やってみて、ト書きの言葉と、それを実際に行動に移すことの間に、もう少しスペースがあったほうが良かったかなと感じました。人物たちが何らかのシステムの中に組み込まれてしまっているようなイメージが欲しかったのです。

○ **参加者** 今日の台本は上演を前提として書いていないと、ロリケさんはおっしゃいましたが、そういう書き方は、デンマークでは一般的なのでしょうか？

○ **ロリケ** ほとんどの劇作家は劇団の一員で、その所属俳優との繋がりががありますので、上演のことを考えながら書いていると思います。私は 25 才までは演劇と関わっておらず、文学の方から入ってきましたので、そのような視点なのです。

○ **参加者** 作家と演出家は別であることが多いのですか？

○ **ロリケ** ほぼ別々です。どこの芸術監督も「自分で書いた作品を自分で演出するのはやめたほうがいい。別の視点を持った人に任せるべきだ」と言いました。

■ イエンセン 2 回目

● デンマークでは俳優は高価

○ イエンセン 『予定通りの出発』の台本では、私は 1 人の俳優が複数の役を演じられるように書いています。なぜかという、デンマークでは俳優を雇うのはとても高価なので、1 人 1 役ということにすると制作費が高くて、誰も私の戯曲をやってくれないからです。

第 1 場は、テオが精神療養施設にいて、それまで会ったことのなかった父親と会うシーンです。もう 1 人、精神科医が登場します。今日は、この精神科医役を 3 人の俳優でやってみようと思います。私が人物を書くときにポイントにしているのは、「この人物は、どういう問題を抱えた人なのか？」という点です。精神科医役としてどれくらいリアルなのかということには、あまり力点を置いていません。

- ・ 舞台設定 実際の精神病院とは違うかもしれないが、自殺防止のため患者をマジック・ミラーで監視しているという設定。立ち稽古。

■ ロリケ 2 回目

○ ロリケ 『マニフェスト 2083』のバック・グラウンドについてお話ししたいと思います。これは、いわゆる戯曲とは違います。2011 年 7 月 22 日にノルウェーで大量殺人がありました。その頃、私はコペンハーゲンの昔からある劇場の芸術監督に就任したばかりで、このときは昔からの知り合いだった俳優と会う約束をしていました。それでノルウェーの大量殺人の話になり、大量殺人はこれまでもいろいろあったが、77 人もの大量殺人であったこと、政治的な動機のあるものだったことが、私たちの興味を引きました。このとき会っていた俳優のオラフが、犯人であるブレイビクの書いたマニフェストをすでにダウンロードしており、パソコンの中に持っていると言ったのです。彼がこのマニフェストにすごく入れ込んでいるのが分かりましたし、私もとても興味があったので、どのように出来るかは分からないが、なんらかの形で演劇に出来ないか試してみようということになりました。

その間にメディアでは、犯人は狂人だとか、異常者だとか、小児性愛者だとか、彼を悪魔的存在に仕立て上げつつありました。そうした報道が続くのを見て、私はこのプロジェクトをやるべきだと思いました。



約 2 ヶ月後の 9 月に、私たちが「マニフェスト」の一部から作品を制作するというプレス・リリースを新聞社に送ると、大騒ぎになりました。「なんで、そんなことをするのか?」「金儲けのために、こんなことまで利用するのか?」

といった批判が沸き起こったのです。ノルウェー、デンマーク、スウェーデンの演劇人の 80% が「時期尚早だ。」という意見でした。

それで、公演初日は 1 年後ということになりました。スカンジナビア半島中の犯罪小説を書く作家などが「やるべきでない」と言い、多くのジャーナリストが「なぜそんなことをするのか？ 何を達成できているのか？」と訊いてきました。

私も神経質になりました。しかし鍵となる二つの疑問は、「この問題を作品化するのは＜時期尚早＞なのか？」(逆に言えば、ではいつなら尚早でないのか?)ということと、「この上演は何らかの形でアンネシュ・ブレイビクを擁護することになるのか？ アンネシュ・ブレイビクは事件について何も発言してはいけないのか？」(なぜなら、テロリストの目的はいつも世間の注目を自分に集めることだから)ということです。

公演初日を 1 年後に予定していましたが、ノルウェー政府が事件の裁判をなるべく早く行おうとしていて、ちょうど 1 年後のその時期が裁判の時期と重なるので、半年間、初日を延期して、その間の様子を見ようということになり、結局、1 年半後に初日を迎えました。世界中のあらゆる種類の新聞がその公演のことを書き、そして私たちが公演したのは地下にある客席が 49 席しかない劇場なのです。デンマークの過去 50 年間の演劇史の中で、最も注目を集めたわりに場所が小さかった一番の出来事だろうと思います。

しかしまた、私はこれをきっかけに演劇に対するある種の確信を持つことが出来ました。多くの人々が、アンネシュ・ブレイビクに関する有名な作家、哲学者といった人々の発言は受け入れることが出来るのに、たった 1 人の俳優が彼を演じるということは受け入れることが出来ないのです。これはおそらく、私たちが作り出したイメージが、「人間が突然アンネシュ・ブレイビクのようなものになってしまうことがあり得る」というものだったからでしょう。それが怖い部分なのです。そうでないとしたら、単なる金儲けのための、たった 50 人を相手にしたエンターテインメントが、どうして問題になるでしょうか？

誰かがブレイビクになりきるといふ点に何かがあるのかもしれません。プレス用の写真を撮ったとき、俳優はブレイビ



クが着ていた制服と同じ制服を着て、ブレイビクがとったのと同じポーズをとったりして写真を撮りました。でも、その写真は、あまりにも挑発的過ぎるのではないか？という判断で、結局、送りませんでした。

日本の皆さんにどのくらいなじみがあるのか知らないのですが、これはレクチャー・パフォーマンスと呼ばれるスタイルの作品です。このスタイルをとったのは、ブレイビクという人間は社会の中で普通に仕事をしている普通の人で、彼は、自分がその普通の状態のままでは自分が達成したいことを達成できないと考えて、達成

できる人間に変化しようとして取った行動が、俳優が役になりきるように、いろいろなトレーニングを積んで、新しい自分を作り上げていった部分があったからなのです。

● 自分自身と題材との距離

○ **ロリケ** ここで皆さんに聞きたいのは、この事件について聞いたとき、皆さんはどこで何をしていたかということです。これは距離ということの影響を知りたいからなのです。

・参加者各自が当時の記憶を語る。

○ **ロリケ** では、今、体験を話してくださった最後の 3 人の方に前に出てもらいましょう。

・ 3 人、出る。

○ **ロリケ** 即興で、台本の2場の「こんにちは。私の名前は…」からの部分を、ご自分の経験談に置き換えてやってみていただきたいのです。

・ 自分自身の経験談と台本を結びつける



○ **ロリケ** アンネシュ・ブレイビクの言いたいことを非常に、非常にシンプルに言うと、彼はとても古い、保守的な物の考え方をする人で、人間の本性は、男と女は同じではあるはずがなく、男女の平等というのは自然の本性に反しているというようなものです。ブレイビクは、中東からの移民はスカンジナビアの元来のものの考え方や生活様式を破壊すると主張します。

● 多文化主義と、それに対抗する動き

○ **ロリケ** 政治的正しさに焦点を置くよりも、多文化主義に焦点を置いた方がいいように思います。なぜならブレイビクは、政治的正しさは多文化主義に繋がるからという点に置いて、この言葉を持ち出してきているからです。それは、ここ 20 年くらいのヨーロッパで、一番大きな問題です。問題は、移民・難民受け入れなどに対して、どうやって人道的な行動をとりつつ拒否するか、というところが、すごく難しい問題です。

● 参加者に対する課題

○ **ロリケ** 私は、こういう創作作業をするときいつもは、まずテーマを選び、そのテーマにどう関わるかを考えて、それを具現化するのにどうするのが適切かということを考えます。そこで皆さんに宿題を出したいと思います。何か一つ自分が強く関心を持っている政治的なテーマを選び、それに関連する既存のテキスト、それはコマーシャルでも、新聞記事でもいいのですが、あまり長くないものを見つけてきてください。明日は、レディ・メイドのものを利用して、どうやってそれを演劇で利用できるようにするかということをやりたいと思います。

● 『マニフェスト 2083』は、どこまでが作品なのか？

○ **ロリケ** 初日前にマスコミに対して発表してきたこと、それに対する様々な反応があつて、その中でいろいろな人が作品に対して「どのような上演になるのだろうか？」という想像をたくさん巡らせました。同時に、テレビでは裁判の様子が放映され、いろいろな人たちが頭の中で作り上げた恐ろしいイメージと、舞台上で戦うことは不可能だと思いました。でも、舞台上で俳優が実際にブレイビクになっていく様子を見るというのは、そしてブレイビクが語りたかった内容を、実際に誰かが語るのを聞く、その時間というものには価値があつたと思います。

○ **イェンセン** これだけメディアで取り上げられて、大勢の人が見に来たわけですが、その人たちは何を見に来たと思いますか？ 実際にその上演自体を見に来たのか、それとも、何か自分たちの中で空想したものと繋ぎ合わせて見に来たのか？

○ **ロリケ** 最初の半年は、マス(イェンセン)が言ったように、興味本位の観客、上演自体に興味を持ったわけではない観客が多かったかもしれません。でも、それ以降の2年半の間は、この事件自体にとってもミステリー的な部分があつたため、それを理解するためのツールとして、この上演を見に来る観客がいたこと、それと、ヨーロッパの状況が反映されて、何かこの上演から得るものがあるのではないかと期待して見に来た人々がいました。

○ **参加者** 上演をするのが早いのではないか、遅いのではないか、というのは、どこにセーフティー・ラインがあるのだろうか？ ということです。

○ **ロリケ** その事については、この上演以来ずっと考えています。私の答は、誰でも、好きなタイミングで上演することが出来るはずだ、ということになります。なぜなら、他のメディアはすべてこの事件を取り上げ、それに対する意見を発信しているではないですか。なぜ演劇だけが待たなければならないのでしょうか？ただ、いつがいいのか？どうやるのがいいのか？については、ちゃんと自分自身に問うべきです。

○ **佐々木** 『マニフェスト 2083』は、ブレイビクを批判する内容だったら、いつでも出来たでしょう。でも、ブレイビクにも一理あるのではないかと？ ブレイビクを擁護しているわけではないが、ブレイビクの考えを頭っから裁くように否定していない部分もあります。そのため、早ければ早いほど危険を伴ったから「早すぎる」と言われたということなのかもしれないと思います。

○ **ロリケ** 私としては、メディアがブレイビクは精神異常者だったという方向に持っていく流れがあつたので、ブレイビクの側に立つということではなく、単純に事実として彼がやっていたことと向き合うことがしたかったのです。

■ ロリケ 3 回目

- ・ 参加者の「宿題」の成果を報告

○ ロリケ 皆さんが持ってきたテキストはみんな違って、それぞれに面白く、私のツールを示して、それで全部やっていくというのはうまくいかない気がします。ともあれ、まずは、私が準備してきた方向に進めてみて、私がふだん使っている方法についてお話して、あとで、それぞれの材料に対する違ったやり方の提案をさせてもらいたいと思います。

● ボブ・ディラン・トリック

○ ロリケ 一つ目にご紹介するのは私がボブ・ディラン・トリックと呼んでいるものです。皆さんが持ってきた記事、材料は、誰かの主観に基づいた主張のあるものが多かったと思いますが、記事は通常、「～という見方も出来よう／“One can say…”」のように、客観的な立場からの文体で書かれています。そこで私がよく使う手は、“One can say…”を“I can say…”や“He can say…”などに置き換えるやり方です。（「一般的に～と見える」を「私にはこう見える」「彼にはこう見える」に置き換える）

一般的・客観的な書き方の記事に「私は」「彼は」を組み込むことにより、そこに一つの視点が生じ、それが、1 人の人が語っているすごく知的で客観的な内容として受け止められるようになる。そして、リアルな人物像を造形しないでも、それが出来るのです。

● あからさまな結論に、すぐに導かない

○ ロリケ それから、演劇人が抱えている問題についてです。多くの演劇人が「政治的に正しい＝ポリティカル・コレクト」な書き方をしてしまうという点です。ほとんどの場合、観客は「どう感じるべきか」を、とても早く理解してしまいます。

● 普段、聞こえない声を聞かせる

○ ロリケ 私が最初につくった、論争を巻き起こした作品では、集団レイプを取り上げました。その作品を、レイプする側の7人の男だけの視点から描きました。私がそうした理由は、メディアも、その他のあらゆる人々も、被害者がどう感じたかにフォーカスしていたからです。私が作家として自分の仕事と考えていることは、フォーカスが当たらない側、間違った側、政治的に正しくない側に、私の声を貸して、普段、聞こえない声を聞かせるということです。私が作品を作りはじめるときにいつも考えることは、この主題に対する最も驚くべき切り口はどういうもの

だろうか？ ということです。それから、この件に対する最も悪意ある質問、悪意ある声はどういうものだろうか？ ということです。

● 一番書きづらいこと、書きたくないことを書き入れる。

○ **ロリケ** 皆さんが持ってきた材料・記事において、皆さんが書きたくないことは何でしょう？ どうしたら、それを書かせることが出来るだろう？ 記事の内容にみんなが共感しているということについて、それをバカにするような視点の声を入りたいです。ちょっとした短いモノログのような形で。

今やっていることは、私が作品作りをするときの方法で、ちょっと遊んでいるようなものです。私が書くときも、こうやって一つ一つシーンごとに、思いついたものをそのまま作ったものをシーンとして持っていて、それが最終的にどう構成されるかは分からずに書いています。そのあとで、そこに全体を通してリフレインするようなモチーフとかテーマを放り込みます。

私の感じでは、皆さんはたくさんのヘイト・スピーチを集めてみたらいいのではと思います。ヘイト・スピーチにはとても暴力的なところがありますが、気を付けたほうがいいのは、それがあまりバカバカしいものにならないようにすることです。それは強力でドラマチックな原動力になるものです。それらの材料を、いまは何も自分で検閲せずに、その悪意と付き合っていくって、どこに行きつくのかを見て欲しいのです。

■ イエンセン 3 回目

- ・ 以後、この日は台本の基本的な解釈についての質疑応答

ワークショップ

4 日目 11 月 27 日(金)

■ イエンセン 4 日目

○ **イエンセン** 21 場に行きましょう。

ここもヤンセンとテオ、2 人だけのシーンです。ここは 2 人の関係が完全に構築されたシーンなのですが、ここにある考えとか、お互いの気持ち、思いのようなものをベースにして、何か別の言い方は出来ないかなというのを探求してみたいと思います。

このシーンには二つの層があると私は思います。それはお互いに繋がったものではありませんが、まずは分離してみたいと思います。一つのレベルはヤンセンとテオ、基本的な感情のレベルです。



もう一つの層は経済的なマインドの層です。人に感情を表現するにしても、お金を介在させるしかヤンセンには方法が分からない。では、テキストを分解して、感情の層と経済の層がどんなふうに絡み合っているか見てみましょう。

- ・ 物質の名前をテキストに加え、テキストを解体。俳優が感情はキープしたまま、
テキストから自由になるための実験

○ イエンセン いまお見せしようとしているのはテキストにいろいろな角度から接する方法なのです。

こうした状況、あるいは物質との関わりの中で演じるというのは、私は能からヒントを得ています。能にはこういったアイディアがあるのです。たとえば、自分の内側では発見できない何かを表現しなければならないことがあります。自分の内側から気持ちを探すのではなく、外側の何ものかに働きかける、すると何ものかが働き返してくる、それによって感情が生まれる、こういうプロセスをいま探求しています。

この方法は能のものです。きっと西洋の心理的なテキストでも適用することが出来ると思います。また、テキストを解体してしまうことも出来るのです。

■ ロリケ 4 日目

○ ロリケ 二つのテキスト、アプローチを用意してもらったと思います。

- ・ 各参加者のテキストの発表とそれに対してロリケのコメント。

もっと違う視点も必要ですね。昨日も言ったのですが、こういうときに危険なのは、観客が作家の立場、何が良くて何が悪いと作家が考えるのか、というのが、あまりにも早く分かってしまうことなのです。ですから、題材にはもっとたくさんの考え方を入れ込んで、問題を複雑化していくのが良いと思います。

- それぞれの参加者に対するロリケからの課題提案があり、発表

ワークショップ

5 日目 11 月 28 日(土)

■ イエンセン 5 日目

○ イエンセン 3 場からやりたいと思います。この場面はリアリスティックな場面ですが、ある点では、極度に強調された要素や、奇妙さもある場面です。そこをちょっとやってみたいと思います。リアリズム的なベースの上に、コミカルであったり奇妙であったりする要素を入れていく、私の手法です。こうしたアイディアは台本を読むだけでは得られないことです。

● 「ヘイト・スピーチ」から優しさの側面を引き出す

○ イエンセン 2 場の車掌の最初の長台詞はヘイト・スピーチのような内容です。ヘイト・スピーチというのは、憎しみのために言うのであれば退屈な台詞になります。しかし、この台詞から、優しい側面を読み出してみたいと思います。この感情が 20 場をやるときに必要なのです。

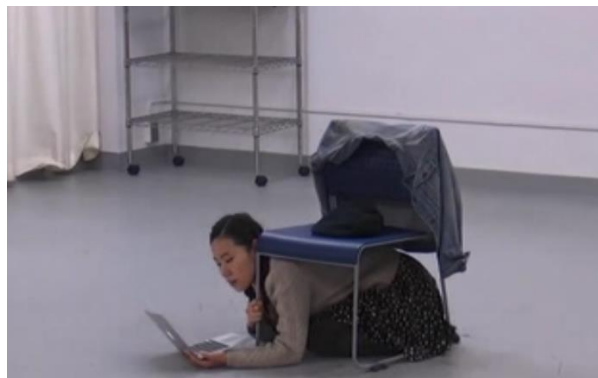
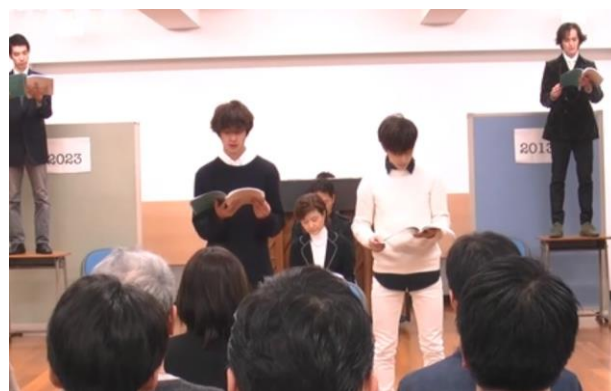
- ・ 20 場の稽古。新たな状況設定、新しい登場人物、別の場面のセリフを足したりする。

○ イエンセン こうした稽古の仕方を奇妙に思われるかもしれませんが、台本の感情的な側面を深く理解するために、こういうことをやってみることは有効なのではないかと思います。この場面の中に必要な台詞がなければ、ほかの場面から持ってきて良い。それでも足りなければ、作家にもっと書くように要求したりすることがあっても良い。このエクササイズは良い演技をしたり、良い場面を作るためのものではなく、作家と俳優の間にクリエイティブな関係を作るためのものなのです。

日本は作家を非常に尊敬しますが、ときにはそれが邪魔になることもあります。作品にもよりますが、大事なのは作家が書きあげたものを完成品として考えることよりも、登場人物たちの心の動きの方を大事にするべきです。

○ ロリケ もしかしたら、これが近年のデンマークの演劇で起きた最大の変化かもしれません。マスと私は、とても新しい劇作家学校を出しました。その学校では、このように演出家や俳優と共同作業をしていました。

■ ロリケ 5 回目 参加者の発表



- ・ 各自の発表。その後、ロリケのコメント

● 邪悪な人間も同じ人間である。

○ ロリケ IS は現在、ブレイビクと同じように、悪そのもののように扱われ、彼らにも母があり、家族があり、理由があつてそういう行動をしているのだということが忘れられがちです。私がいつも仕事のベースにしているのは、最も邪悪だと思われている人物に、人間的な面があることを見せることです。私たちには、それを見ようとしなない面があるわけですが。

● 電話帳でも台本になりうる

○ ロリケ 私にとっての大きな経験の一つは、マスと一緒に劇作家学校に行っていた時に、演劇フェスティバルで、ある人のただの電話帳を読み上げるパフォーマンスを見たことです。名前と住所だけを読み続けるのです。でも、それを見て、こんなにたくさんの様々な人々がいるんだと思いました。名前と住所をただ聞いているだけなのに、大きな歴史のようなものも感じました。

● 逆のものをぶつけてみる

○ ロリケ こういう真摯でシンプルなテキストを扱うときには、そこにもう一つ別の層で、それとは逆な感じのものをぶつけて見るのが面白かったりするのです。このテキストの意味は言葉を聞いていれば理解できるので、何をやっても大丈夫です。

「デンマーク演劇：政治とポストドラマ」

● マス・マザンチ・イエンセン氏によるロリケ氏の紹介。

○ イエンセン クリスティアンのレクチャーのタイトルは、「デンマーク演劇：政治とポストドラマ」です。その意味を説明したいと思います。

デンマーク演劇にはいろいろな伝統があります。例えば、バレエの伝統があり、昔ながらの喜劇の伝統もあります。しかし最近、とくに演出家にとって、ポストドラマ演劇は、重要な傾向となりました。現代のデンマーク演劇は、ドイツ演劇から多くの影響を受けました。ポストドラマ演劇は、とてもドイツ的な概念だと思います。

クリスティアンは自分の作品がポストドラマ演劇なのかどうかということにあまり興味はないでしょう。



彼はもちろん、たくさんのポストドラマの伝統、ハイナー・ミュラー、イエリネクなどの演劇の伝統から多くの影響を受けています。しかし、そういった理論的な議論にはあまり興味がないでしょう。

そこで今日は、もっと具体的に、ポストドラマ演劇の概念と政治が混じると、どんな可能性があるかという質問に答えます。具体的な例を挙げて、クリスティアンが答えると思います。

※以下はクリスティアン・ロリケ氏によるスピーチ草稿を元に書きだしたもの。一部、箇条書きになっている部分がある。

● クリスティアン・ロリケ レクチャー

○ ロリケ 私は劇作家としてキャリアをスタートしました。私の関心は、キャラクターやストーリーよりも、テーマにあります。私のテキストではたくさんの要素形式のストーリーテリングを使いますが、しかし、主目的はいつもトピックの探求なのです。私の芸術的なドライブ／原動力は、いわゆる現実社会と呼ばれるもの、つまり私たちの社会での何らかの出来事に対するリアクション／反応にあります。すなわち社会に向けての批判になってなければならず、あるいは少なくとも、規則、規範、タブー、あるいは、9.11 のような現実の出来事に対する受け止め方を探求するメディアでなければならないと考えます。

私にとって演劇は次のような可能性を持ったものです。

- a) 現実世界のものごとに対するすばやい反応
- b) 大きなお金からの十分な独立—検閲なし
- c) あらゆる形式を利用することが出来る

とくに最後の点、なんでも好きな形式をとることが出来るということが、私がソート・ヴィウ (Sort/Hvid) というシアターをオープンするときのキーとなりました。4 年前のことです。私のプランは(その時も今も) 世界はステージであり、

我々はどんな種類のパフォーマンスも出来るのだという考えに基づく国際的なシアターを作ることです。
では、ソート・ヴィウの過去 4 年間の活動をご紹介します：

● MANIFEST 2083

*コメント内容は 11 月 25 日(水)ワークショップ内のものと重複しているので、そちらを参照に。

● ALL MY DREAMS COME TRUE

もうひとつの作品は『all my dreams come true』です。ディズニーと鬱病についての作品です。公演の最初の部分をお見せします。彼らは誰が一番落ち込んでいるかを競っています。それから彼らは、美しくあるということのアイデアがいかにコマーシャルだけでなくディズニーと、その物語によって我々に押し付けられているかについて話します。彼らはちがった種類のおとぎ話を語ることに決めます。それからそれが起こります。

- ・ 『all my dreams come true』映像

● IN CONTACT – 戦争バレエ

それから私はデンマーク王立バレエ団から、バレエを革新するアイデアはないかと聞かれました。それで私はデンマークのバレエを見はじめ、バレエはいつも愛や死などの永遠の価値についてのものであり、地面に足をつけた人間ではない、人間以上のものになる話ばかりだと気づきました。いつも礼儀正しく、退屈で、美しいのです。私は、本物の退役軍人を使ったバレエを提案しました。戦争で傷を負った兵士たちです。私はその作品をアフガニスタンとの 14 年間もの長い戦争に参加したデンマーク人についてのものにしましたかったのです。



- ・ 『IN CONTACT』上映

私はこの作品を、次の点にフォーカスさせたかったのです。

「人はいかに殺し方を学び、彼らはどんなミッションをこなすことを期待されており、そして実際にはどうなるのか」

● 『人形のパーティー』

もう一つの作品は『人形のパーティー』と呼ばれるものです。この作品で私は、なぜデンマーク人は政治に飽き飽きしているのかを探求したかったのです。デンマーク人は政治家の言葉を信用していませんでした。彼らはそれらをすべて media-spin =メディアを通るときに変形されていると考えるのです。

私たちはデンマーク議会に突然オペラ歌手を連れて行き、政治家たちがかつて発言した言葉を歌わせました。

- ・ 『人形のパーティー』上映

私たちは実際に国会議員選挙に立候補しました。十分な投票者を得ようと努力したのです。しかし奇妙な連中と思われ、人々の信頼を本当に勝ち取ることは出来ませんでした。しかし、たくさんの人々が私たちの、新しい行動に共鳴してくれました。

・ 写真紹介

● WE ARE NOT REAL

公共の場所でのインスタレーションです。最近ヨーロッパは、シリアとアフリカからの何千人もの難民たちのターゲットになっています。多くは地中海を渡ります。私は毎週、船が沈み 300 人、500 人、550 人以上が死んだとの記事を読みます。私は人形作りの人に頼んで非常にリアルな水死者の人形を作ってもらいました。それを街のあちこちに置いて場所をどんどん変え、街の人々は、いつ「水死者」に出くわすか分からないという状態にしました。

そこにこのようなテキストを付けました。

「私たちはリアルではない」

そして、海上でボートに乗るのはどんな状態か、魚に食べられるのはどんな気持ちか説明しました。近くにはたくさん
のフォーチュン・クッキーを置き、おみくじを引くと、そこには生き延びた人たちの証言、ボートに乗っているとき、
どんな将来像を見ていたかが読めるのです。

● **LEAVES**

古い病院の地下 1500 平米のところで、私はエフタクラングというバンドとともにホラー・オペラをやりました。物語は、ある大災害がおこり、人々が安全に地下に集まり、彼ら自身の生活形式を作り出すというものです。観客が本当に理解したかどうか分かりません。でも私は、見た人が、絵を見、音楽を聞いて、雰囲気を感じ取り、自分なりの物語を作り出しただろうと思います。

• LEAVES 上映

レクチャーは以上となります。

..... 記 録 広田豹